主 要 文 献

1. Wachsmuth. W. Deutsch. Med. Wschr. 61, 1084—1087, 1935.
2. 齊藤一男 日 整 会 誌 9, 477—550
昭 8, 9 年
3. 金田 他 臨 床 外 科 9, 125—127
昭 28 年
4. 高梨重武 交 通 医 学 9, 1, 54—59
昭 30 年
5. 諸富武文 他 臨 床 と 研 究 32, 1, 50—55
昭 30 年
6. 野原道夫 岩手医学雑誌 6, 196—199
昭 30 年
7. 軀田幸徳他 日本医科大学雑誌 32, 843—849
昭 31 年
8. Bonnin 「足関節の外傷」 London 1559
9. ヤコブ 米国スポーツ・イラストレーテッド誌
(オールスポーツ
昭和 32 年 1 月 9 日より引用)

下
腿
骨
々
折

脛 骨 々 折

(第 13 回 主要文献中訂正)

J. G. Bonnin "Injuries to the Ankle" William Heinemann, Medical Books. LTD. London 1950.

外 傷 性 脱 臼 の 統 計 的 観 察

添 田 町 宮 城 容 中
宮 城 董 容
宮 城 大 全

The Statistical Observations of the Fresh Dislocations

By

Y. Miyagi, T. Miyagi and D. Miyagi

Soeda.

1) 緒 言

外傷性脱臼は骨折に較べ頻度も少なく、且つ比較的陳旧例を除き、研究の対照となる事が少なく、珍らしい症例の報告や、或いは一関節のみの脱臼に関する報告がしばしば認められるのみで、総合的な研究、観察は、極く少数の、それも大学病院等の大都市に於ける病院の報告に限られて居る。私共は筑豊の炭坑地帯を中心とし、一部北九州の工業地帯を含む地域に於て、過去 3 年間の脱臼患者を調査、統計的に観察し、2、

3 の知見を得たので、文献的考察を兼ね、考按を加えつゝ報告し、諸賢の御批判を仰ぎ度いと思う。

2) 総 論

吾々が過去 3 年間に経験した脱臼患者は 403 名で、之は同じ期間中の外傷患者総数 22,401 名 に対して、僅か 1.8 % であり、又骨折患者の 8,094, (38.1 %) に比べて可成り低い頻度を示し、飯野氏の骨折と脱臼比 10 : 1 に対し、私共の例では、21 : 1 で極めて少なくなつて居る。脱臼を各関節別に見ると、上肢は 355 例、

表 1 年 令 別 の 各 関 節 脱 臼 頻 度

年 令	肩	肘	鎖	腕	指	股	膝	足	趾	その他	計
～9才	0	29	0	0	7	0	0	0	2	0	38
10才～	5	43	6	4	18	2	2	2	2	0	84
20 // ～	18	20	18	7	14	3	2	4	2	2	90
30 // ～	12	5	13	5	5	0	0	2	1	1	44
40 // ～	16	6	11	4	8	1	0	0	0	3	49
50 // ～	20	3	7	6	3	3	0	3	2	3	50
60 // ～	11	2	7	1	3	5	0	0	0	1	30
70 // ～	12	1	1	0	1	0	0	0	0	0	15
80 // ～	2	0	1	0	0	0	0	0	0	0	3
計	96	109	64	27	59	14	4	11	9	10	403

(88.9%), 下肢 35 例 (8.7%) で諸家の統計と大差はない。尚, 残り 10 例は, 顎, 脊椎等の脱臼である。

部位別では, 肘関節が最も多く, 109 例 (27.1%) で次いで肩関節, 鎖骨の関節, 指関節, 腕関節の順となつて居る (表 I), 又, 性別では男子 309 名 (76.5%) に対し, 女子 94 名 (23.5%) で凡そ, 3:1 の割合となり, 左右別では右 195 名, 左 202 名で, 左右は大した差は認められない。年令別では肩, 股, 腕関節では 40, 50 才台の高年者が多く, 肘, 手指関節では, 10 才台を中心とした若年者に多く見られる。この為全症例に亘る年令別では従来の Speed, Hoffa 等の統計と異なり, 10, 50, 40, 30 才台の順となつて居る。

3) 各 論

i) 肩関節: —この関節の脱臼は従来の統計では第 1 位で, 全脱臼の殆んど半数を占めると云はれて居るが, 私共の例では前述の如く, 肘関節に次ぐ第 2 位で, 23.8% である。原因は墜落が最も多く (38.8%), 次いで転倒, 喧嘩等となつて居る。脱臼は烏喙下脱臼が 61 例で最も多く, 次いで腋窩脱臼 32 例で, 之に肩胛骨前方脱臼 1 例を含む, 前方脱臼が 96 例中の 94 例で, 後方脱臼は僅か 2 例にのみ認められた。年令別では, 50 才台が最も多く, 次いで 20 才台で, 以下, 40, 70, 30 才台となつて居るが, この間に大差はなく, 10 才台は割に少なく, 10 才以下には 1 例も見られない。

合併症は, 腋窩脱臼に最も多く, (19 例中 13 例) その種類は上腕骨上端部骨折が 22 例, 肩胛骨々折が 1 例

であつた。又合併症を有する例は 60 才台に最も多く, 111 例中 7 例で, 以下, 50, 70 才台となつて居り, 若年者では 20 才台に 1 例見られるのみで, 10, 30 才台では皆無である。通院期間は, 合併症の有無により相違が認められるが, 脱臼のみの例では 6 週で治療を打ち切つたものが最も多く, 次いで 3 週, 2 週で, 平均 4.4 週となつて居る。

ii) 鎖骨の脱臼: — Gurit は鎖骨の脱臼は全体の 5% を占めると報告して居るが, 私共の例では 15% の多きを占め, 決して少ない数ではない事を示して居る。原因別では, 転倒, 墜落 (夫々 17 例, 26.5%) の他柔道が多く (15 例, 23.4%) このために年令別では 20 才台が最も多く (23 例) 次いで 30, 40 才台となつて居る。脱臼部位は, 肩鎖関節が 64 例中, 52 例で, 胸鎖関節は 12 例にすぎない。合併症は鎖骨々折が大半を占め, 少数の肋骨々折も見られるが, それらは殆んど 60, 50 才台の高年者に見られる。合併症のない例の治療日数は, 肩鎖, 胸鎖関節共に 3 週間が最も多く, 最長治療日数は肩鎖関節で 8 週, 胸鎖関節で 7 週となつて居り, 平均日数は肩鎖関節 27 日, 胸鎖関節 25 日である。

iii) 肘関節: —この関節の脱臼は従来は肩関節に次ぐと云はれて居たが, 私共の例では 109 例, 27.1% で第 1 位を占めて居る。この事は都会の大病院を地方病院との差にもよるし, 又この脱臼は青少年に多く, 近代スポーツの興隆, 産業の発展に伴う交通網の発達等の原因で, 子供が外傷を蒙む機会が多くなつて居る

表 2 肘関節脱臼時の合併症の種類及頻度

種 類 \ 年 令 例 数	～9才	10才～	20才～	30才～	40才～	50才～	60才～	計	%
総 数	29	43	20	5	6	3	2	109	
外 顆 骨 折	3	5						8	12.9
内上顆 //	12	11		1				24	38.6
通 顆 //	1	1						2	3.2
顆 上 //	3	4						7	11.2
上 膊 //		1	1		1		1	4	6
両前膊 //	2	1						3	4.8
橈 骨 //	2		1			1		4	6
尺 骨 //	3	4	1	1	1			10	16.1
計	26	27	3	2	2	1	1	62	
合併症の頻度	90%	64%	15%	40%	33.3%	33.3%	50%	56.8%	

事にもよろうが、何よりも、肘関節脱臼は比較的に整復され易く、受傷后直ちに、所謂整骨師の治療を受け医家の統計に現はれなかつたのが原因しているのではないかと考えられる。原因の大半は、転倒、墜落であるが、前の二関節の場合と異なり、柔道より、寧ろ相撲、野球が多くなつて居る。脱臼の形態は、両前膊後方脱臼が88例で、その中、後方脱臼81例、側方脱臼6例、前方脱臼1例である。前膊単独脱臼は21例で、

中、尺骨脱臼6例、橈骨前方脱臼10例、橈骨后方脱臼5例である。

合併症を伴うものは109例中62例で、半数以上に認められ、その中で内上顆骨折が最も多く、次いで尺骨々折で、両前膊骨折は3例に認められた。(表2)合併症を年令別に見ると、10才迄では90%、10才台では64%に合併症を伴なつて居り、若年者程骨折を伴うものが多い。治療日数は年令により差があり、10才以下では最も短かく1.5週で、30才台が最も長く、3.6週で、平均2週となつて居る。尚合併症を有する例では7週を要して居る。

iv) 腕関節及び腕骨の脱臼：— この脱臼は27例、7.5%で第5位にあり、原因は交通事故や、労災関係

レ 1 肘関節側后方脱臼
(両前膊骨折を伴う)

レ 2 腕関節掌側脱臼

等比較的強力な外力によるものが多く、27例中、23例(85.1%)は合併症を有して居り、その種類は橈骨々折が9例(39.3%)で最も多く、両前膊、尺骨、腕骨、中手骨々折の順となつて居る。その形態は全例共、掌側脱臼である。尚、この中には、腕骨の脱臼として、豆状骨脱臼、月状骨脱臼、腕骨間の脱臼が夫々1例宛に見られる。

v) 指関節の脱臼：— この脱臼は59例で全体の14.6%に相当し、原因も転倒の外、野球、喧嘩等となつて居り、年令的には主として10, 20才台で、総て、背側脱臼である。各指別の頻度は表(3)の如くで、拇指が最も多く、次いで小指で、示指が一番少ない。

表3 指関節脱臼の部位別 (59例60関節)

	拇	示	中	環	小	計	%
腕掌関節	1	0	0	1	1	3	5
掌 指 //	22	4	1	0	2	29	47
第一指 //	6	1	3	4	2	16	28
第二指 //		1	4	3	4	12	20
計	29	6	8	8	9	60	
%	47	9	14	14	16		

vi) 股関節脱臼：— この部の脱臼は14例、3.1%で Gurit の統計 12.09% よりは少なく、Krönlein の2%よりは稍々高く、諸家の統計と大差はないが順位は7位になつて居る。年令は、60才、50才台等の高年者に多く、原因は、墜落、転倒、交通事故、労災関係が多く、合併症を有するものは、3例で、それ等は総て交通事故によるものである。合併症は骨盤骨折1

例、大転子骨折2例で、脱臼の形態は13例(92.8%)が後方脱臼で、前方脱臼は1例(7.1%)にすぎず、Kneer の統計(前方脱臼 23.4%)に比し著しく低率となつて居る。

vii) 膝関節：— この部の脱臼は極めて少なく、4例(0.9%)にすぎず、原因は交通事故によるもので、10, 20才台の若年者に多く見られ、4例共に脛骨の後方脱臼である。

viii) 足関節部脱臼：— この脱臼は11例で、原因は労災関係が、8例で、墜落、転倒等が3例で、年令も、20才台を中心とした居年者に多く、その形態は、足関節外方脱臼9例で、内方脱臼は1例で、その他 Chopart 関節の脱臼が1例認められた。この部の脱臼11例9例に踝部骨折が見られる。

ix) 趾脱臼：— この部の脱臼は9例で、指の59例に比し甚だ渺なく、年令も比較的若年者に多く、部位は第一趾、中足趾関節が最も多く、総てが背側脱臼である。

4) 結 語

i) 3年間に於ける外傷性脱臼患者は、403名で之は、全外傷患者の1.8%に相当し、骨折との比は21:1である。

ii) 部位別では肘関節が最も多く、次いで肩、鎖骨指、腕関節となつて居る。

iii) 肩、股関節脱臼は50才台、60才台に多く、肘、指、鎖骨、腕関節は10才台、20才台に多い。

iv) 此の為に、全脱臼の年令別では20才、10才台が多く、50, 40才が之に次いで居る。

v) 性別は男3:女1で、左右別に大差はない。

vi) 肩、鎖骨関節は比較的高年者に骨折の合併症があり、肘関節は若年者程多く、合併症を有して居る。

関 節 内 骨 折 の 運 命

九州労災病院 整形外科 鹿子生 和 夫

The Shicksal of the Intra-articular Fractures

By

K. Kako

Kyushu Labour Accidental Hospital, Kokura
(Director : S. Naito)

関節内骨折が如何なる運命を辿るかは興味ある問題であるが、之に関する業績は寡聞にして多くを知らな

い。関節内骨折の運命と云うも、年令、性別、関節別、単純或は複雑骨折別、骨折型、観察時期、治療法等種々